

## 【お母さんのたからもの】

せんせい あのね おかあさんの たからものは  
ぼくだって

おかあさんの たからものは ぜったい ゆびわだと  
おもっていたけど ゆびわは にぼんめだった

ぼくが たからものになっちゃって こまるよ  
たからものって はめたり つけたり かけたり  
するものなのに

でも なんかいいきぶん  
ぼくは そとへでて はしりまわったよ



小学1年生の詩です。読む者も、なんだか走り回りたくなってきます。素晴らしい詩ですね。

以前の話ですが、高校を卒業して大学浪人中の青年が、家出して我が家にやって来ました。理由を聞くと、自動車の運転免許がとれたので、黙って、お母さんの愛車でドライブに行き、車を大破させてしまったのです。やっと家に帰るや、お母さんから「私の車をどうしてくれるの！」とこっぴどく叱られました。

「お袋は、僕より車の方が大事なんです」  
「違うよ。もし君が怪我をしていたら、お母さんは決してそんな言い方をしなかった」  
私がどんなに説得しても、彼はなかなか家に戻ろうとしませんでした。

聖書の中に、有名な放蕩息子のたとえ話があります。父親から無理に財産分けをしてもらった息子が、大金を全部使い果たして、落ちぶれた姿で帰って来た時、小言を一切言わずに抱きしめ、大宴会を催して、わが子を再び取り戻した喜びを表した父親の話です。

神さまの教えに背き、御心を悲しませることを繰り返してしまう私たちですのに、神さまは何度も何度もこう語りかけて下さいます。「あなたは私の宝だ。私の目には、あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。」

私たちも神さまを愛して、神さまに応答していく生き方を始めるならば、神さまは、どんなにお喜びになるのでしょうか。そして私たち自身も、神さまに深く愛されて宝物とされている喜びに、走り回りたい気持ちになるでしょう。

## 【神さまなんかきらい】

私は札幌時代30年間、シンガポール時代10年間、幼稚園のお友だちに、聖書のお話をしてきました。シンガポールでのことです。ある日、やんちゃ坊主が先生に言いました。「加藤先生なんか嫌いだ。神さまのお話しかしないんだもの」「あれあれ、嫌われてしまった」と、少々ガッカリしました。

それから10日ほどたった月曜日の11時過ぎに、お手紙の原稿を園長先生に届けに幼稚園へ行きました。すると外遊びをしていたそのお友だちが、いち早く私を認めて、門に駆け寄って来ました。

「加藤先生、どうしてこんなに遅く来たの？ どうして？ どうして？」とそれは真剣に聞くのです。「いつもは9時半に来て、聖書のお話をするのに、今日はこんなに遅くに来てしまって。もう、お話の時間は過ぎてしまったじゃないか」という意味味なのでしょう。

私はその口調から彼の心がわかりました。このお友だちは、加藤先生が嫌いでも、聖書のお話が嫌いでもないのです。ただ「イエスさまは、そんな事お嫌いよ」「神さまがお悲しみになるよ」と言われるので、少々イエスさま、神さまをキュークツに思ったに過ぎないのです。本当は好きなのです。



彼自身、自分の行動が良くなかったことをちゃんと知っていて、気になっているのです。しなければいけない事が出来ない。してはいけない事をしてしまう——これは私たち大人でも同じですね。この心の内の葛藤こそ、神さまが私たち人間にお与え下さった「良心の働き」です。

私はそのことがわかって、とても嬉しくなりました。ですから、小さなお友だちを励ましながら、聖書のお話を聞かせ続け、一緒にお祈りを続けてきました。時々、神さまが嫌いになる気持ちを、大切に育てていきたいものです。